

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十一回）

かる やしろ
「軽の社」

あま いはひつき
天飛ぶや 軽の社の 斎槻

いくよ こもりづま
幾代まであらむ 隠妻そも

作者…未詳（巻十一―二六五六）

（解説）軽の社にそびえて長い歳月を経た神木の槻の木のように、何時までこうして人目を憚る関係にある妻なのであるうか。と嘆いた歌であろう。

「天飛ぶや」―枕詞。軽にかかる。

「斎槻」は神としてあがめ祭る神木の槻（つき＝ケヤキの古名）

「槻（＝ケヤキ）」は北海道を除く各地に分布する広く平たい葉をもつ広葉樹。

「隠妻」―人目を憚る関係にある妻。

「軽の社」は一般的に不明といわれるが辰巳和弘氏（元同志社大学教授）は著書に次のように記述している。

・「軽の社」は奈良県北部に位置する橿原市を通る近鉄南大阪線橿原神宮駅西口から西へ徒歩約4分先の軽古集落北部に鎮座す

かるこむらにいますじんじや
る軽樹村坐神社（現・橿原市西池尻町小字軽古）の神社名

にある「樹村」は樹木の群れのこと。社叢（しゃそう）かろこむらにいますじんじや神社の森）の景観を表現した社名である。この神社が軽の地名を冠していることなどから考えると「軽の社」が軽樹村坐神社であったと
同定して間違いないだろうと著書に記述している。

（参考文献）・辰巳和弘著「聖樹と古代大和の王宮」・日本古典文学大系「萬葉集」等

（写生地）

檀原神宮西側に位置するする軽古集落の小高い丘の森に鎮座する

「軽樹村坐神社」境内と神社を囲む樹々を描く。（池田杏花）

